

帝塚山派文学学会 会報 第1号

発行日：平成28年4月30日 / 電話：090-6608-5576
事務局：〒558-0053 大阪市住吉区帝塚山中学3-10-51 帝塚山学院内

帝塚山派文学学会 第2回研究会/第2回総会開催のお知らせ

標記研究会と総会を下記の通り開催します。

第2回研究会

日時：平成28年6月19日（日）13:00～16:20
場所：帝塚山学院住吉校舎（南海高野線帝塚山駅下車）
4階集会室

研究発表 ①帝塚山学院大学名誉教授 鶴崎裕雄氏
『ヴェルジェ』と『春泥集』——帝塚山学院の貢献
②日本福祉大学社会福祉学部教授 永岡正己氏
「長沖一の生涯と文学世界」

第2回総会

日時：平成28年6月19日（日）16:30～17:00
場所：上記研究会会場と同じ
議題：1. 平成27年度会計報告および活動報告
2. 会則改定の件
3. 平成28年度事業計画の件

帝塚山派文学学会 記念文化講演会開催のお知らせ

標記記念文化講演会を帝塚山学院創立100周年記念行事の一環として開催します。

主催：帝塚山派文学学会
共催：大阪市住吉区役所
日時：平成28年10月9日（日）13:30～16:25
場所：住吉区民ホール小ホール（大阪市住吉区南住吉3-15-56 電話06-6694-6100）
南海高野線沢ノ町駅下車 東へ徒歩5分
基調講演：「千島土地株式会社の沿革と社会貢献」
講師：千島土地株式会社社長 芝川能一氏
講演：「庄野潤三と帝塚山学院」（仮題）
講師：日本大学芸術学部文芸学科常勤講師 上坪裕介氏

帝塚山派文学学会 第1回研究会開催報告

去る3月27日、帝塚山学院住吉校舎AVホールで、会員約40名の参加のもとに、当学会の第1回研究会が藤澤桓夫をテーマとして開催されました。研究会は、総会を兼ねたシンポジウムとは別に、今後3回開催する予定で、地道な研究成果を蓄積することを目的とします。（裏面に続く）

「藤澤桓夫の『街の灯』をめぐって」 発表者：高橋俊郎副代表

純文学作品から出発した藤澤桓夫が昭和8年の『街の灯』、昭和9年の『大阪の話』、昭和11年の『花粉』を経て、昭和10年代に自己の文学の方向を明確に変えていったことについて、「この才能豊かな作家は次第に純文学から遠ざかるに至った」（伊藤整）とするのが一般的な藤澤評になっています。発表者は藤澤の『文学手帖』（昭和23年刊）所収の「作家精神の問題」中にある、「私は（社会主義的リアリズムの文学と新心理主義の文学に加えて）今一つのジャンルを加へたいと思つた。それは、人間を含めた自然の生活力の素朴な美しさを主張する文学、太陽の匂ひや生きる歓びや新鮮な果実の歯ごたへをもう一度人間に思ひださせる文学、生命の文学である」を引いて、藤澤を単なる「通俗小説」作家に括る評価に疑問を呈しました。

この発表では、藤澤が「夕刊大阪新聞」に『街の灯』を連載するにあたって、編集長の佐藤卯平衛に宛てた書簡（高橋副代表所蔵）が紹介されました。そこには「力を落さないで、思ひ切り平易に、すべての読者に愛し親しまれるやうな、明るくたのしい物語を書きたいと思ひます」とあります。この書簡は、後の藤澤の文学的転換への最初の表明として貴重な文学資料であるとともに、『街の灯』の文学的な位置を明らかにする重要な資料ともなっています。

発表者は、『街の灯』のコンセプトや周辺を説明したあと、次のように話をまとめました。

藤澤桓夫の小説は『街の灯』の前後で大きく変化した。それを単純に「新聞小説の名手と見なされ、通俗小説を大量に生産するようになった」と一面的に評価してしまっているものだろうか。「街の新しい親しい人間たちの型、そして自分で自分の生計を立てて行く若い人たちの朗らかな生き方、生活をもつといふこと、それから新しい笑ひ、それらを描き出してみたい」との一念で、以降の小説家人生を貫き通した藤澤文学は、古典的な「純粹小説」論争や「中間小説」論争を超えて、現代的な文学の課題を提示しているものだと考える。藤澤の作品は絶版になって久しいが、『街の灯』はもちろんのこと、その他の作品についても復刊が必要である。

「藤澤桓夫の文学的転進」 発表者：八木孝昌運営委員

昭和22年刊の『燃える石』の「あとがき」で、藤澤は「弁証法的唯物論者だけが、世の中を——自然を、人間を、社会を、正しく見、正しく描くことが出来る、と二十代の私は考へた。そして、（中略）この信念は四十三歳の今日に至るも少しも変つてゐない」と書き、また、同じ昭和22年刊の『大阪』の「あとがき」では、「私が『大阪』を『婦人公論』に連載したのは、昭和十一年、私が三十三歳の時のことだつた。その頃から私は一つのことを真剣に考へてゐた。すぐれた人間の文学は、所謂純文学の狭い垣を破つて、広く万人の心に流れ入るものでなければならない、そのやうな高い楽しさを作品の形式とし内容として具へたものでなければならない」と書きます。発表は、相矛盾するかに見えるこの二つの表明がどのように結びつくのか、を考えようとするものでした。

純文学作家として出発した藤澤は、大正15年に東京帝国大学文学部に入学します。そして長沖一らとともに東大新人会に加入して左翼的活動に関わるとともに、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）のメンバーとしてプロレタリア文学作品を書きます。昭和5年以降、日本プロレタリア作家同盟は日本共産党（治安維持法のもとでの非合法組織）の強い影響力を受けるようになり、同盟の作家たちは「左派（政治主義派）」「調停派」「右派（政治主義反対派）」に分解しはじめます。そして、昭和9年2月に作家同盟は解体を決定します。この大きな変動期に、藤澤桓夫は東京におらず、昭和5年の秋から3年間は信州の富士見サナトリウムで療養生活を送り、その後は大阪に戻ります。

発表者は藤澤の昭和初期の足跡を辿った上で、以下のように結論づけました。

政治主義文学論の持ち込みに端を発してプロレタリア作家同盟が分裂と解体の過程に入ったとき、藤澤はその現場から遠く離れた場所において、渦中に巻き込まれなかった。このことが、文学における政治主義の「狭さ」に批判的であった藤澤を独自の《非政治主義大衆路線》文学（「広く万人の心に流れ入る文学」）へ転進させるとともに、マルクス主義のうちから、政治分野を捨象した、哲学分野としての「弁証法的唯物論」を藤澤の内部に温存させた。転進後の藤澤文学には「弁証法的唯物論」が垣間見える未来社会のイメージが寄り添っているかに見える。